
離宮にて

零新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離宮にて

【Nコード】

N5346R

【作者名】

遷新

【あらすじ】

湖の離宮に暮らすセングムは、ある夜、不思議な香りをかぐ。そして香りと共に部屋を訪れた不可解な気配。その気配の正体は何なのだろうか。湖を隔てて互いを想う、女王と青年の物語。

第一話

闇の中に漂う、濃密で甘い香り。

その匂いにセングムは目を覚ました。

開いた瞳に映るのは、ただ黒々とした闇ばかり。水底に沈む蔭りにも似た、深く底の見えない闇が、房室^{へや}の空気を均等に覆っていた。何も見えず、何も聞こえないその空間に、やはり音もなく甘い匂いが漂っている。

匂いをそのまま味として感じてしまいそうな、とても強く濃い香りだった。けれどいったい何の香りなのか、彼にはまるで見当がつかない。

離宮に咲く珍しい花の、その匂いがここまで届いたのか。

あるいは宮のどこかで、誰かが香でも焚いているのか。

香りの出どころを考えつつ寝台の上でぼんやりしていると、やがて現れたときと同じく、強い香気は何の前触れもなく消えていった。匂いが闇に溶け消えた後には、少し冷えた夜気だけが残った。房室の中は何事もなかったかのように静まり返っている。音も光もなく、闇そのものが息をひそめているかのような静寂。こんな夜には、決まって雨が降る。

果たして待つまでもなく、少し開いた跳ね上げ窓から雨の匂いがしのび込んできた。小さな雨粒が屋根に落ち、ごく微細な衝撃を瓦に残す。衝撃は互いに共鳴しあい、低く唸るような振動となつて壁を柱を伝って背骨を震わす。雨の落ちる音を体の奥に感じながら、セングムは再び瞳を閉じ、眠りの淵へと沈みこんでいった。

セングムの暮らす離宮は、その名を《水離宮^{シュナング・ノヤ}》という。

瑠璃色の屋根瓦を頂く小さな宮で、広大な湖の中央にある離れ小島に建てられている。しかしこの小島自体も自然にできたものではない。湖の中央部は、ちょうど岩礁のように岩が密集し隆起してい

る。そこを均して石材を積み、さらにその上に土や木材を運び込むことで、長い年月をかけて造られた人工の島なのだ。

島は湖の岸辺の、そのどの位置からも遠く離れており、岸と小島を結ぶ橋は設けられていない。ゆえに離宮へ出入りするには船を使うより他なかった。湖は深く水は冷たく、泳いで離宮から出ることはできない。そのせいか、この離宮をして、水に囲まれた美しい牢獄シユナング・ダロ《水宮牢》と呼ぶ者もいた。事実この宮は、数代前の発狂した王妃を幽閉するために造られたものだ、まことしやかに囁かれている。

しかしセングムにとって《水離宮》は居心地のよい場所だった。瀟洒だが小ぢんまりとした離宮には、身の回りの世話をする下官が数名と、わずかな護衛がいるだけ。何の誉も華やぎもないが、軋轢や喧騒とは無縁の生活が約束されている。常に宮を囲んでいる静謐な空気に身をゆだねていると、湖の水面のように心が凪いでいく心持がした。

もしも噂が真実なら、とセングムは思う。この離宮が気狂いの妃のために造られたものとしたら、それも道理ではないだろうか。宮中の闇に心を蝕まれた者にとっては、《水離宮》の静けさこそが、きつと何よりの救いになっただろうから。

陽が天頂から少し傾いたころ、セングムはカルガシュを伴って院なか子へ足を向けた。カルガシュは宮の護衛の一員で、常に影のようにセングムに付き従っている。口数が少なく、愛想がいいとは言いがたい青年だが、セングムはこの寡黙な護衛に信頼を寄せていた。

幾度か回廊を曲がり、短い橋を渡ると、四方を西域風の歩廊で囲まれた院子へ出た。美しく整えられた庭には、異国からもたらされた花が植えられ、柑橘類に似たさわやかな芳香を放っている。庭を横切る小川の縁を、見事な飾り羽をもつ鳥が数羽、水のせせらぎに耳をすませるように首を傾げて歩いている。歩廊を隔てて先はそのまま湖に通じており、今日は風があるせいか、常より大きく波の音を伝えてきていた。

広い院子の一角には小亭^{あずまや}があり、セングムはそこに腰をおろす。柱で囲まれただけの簡素な造りだが、天気がいい日はここで過ごすのが彼の日課となっていた。護衛のカルガシュもまた、何も言わずに背後に控える。セングムは携えてきた琵琶を手に取り、軽くつま弾く。深みのある音が、嫋^{てん}と鳴った。弦のかすかな震えが空気を伝わり、小亭の穹窿^{くわうろう}に反響する。耳に心地よい音だが、何かしら頼りない。弦が少し緩んでいるようだ。

常人にはわからない微妙な音色の差。その差に気づき、気づいた差をいちいち気にする自分を、セングムは心の中で嗤^{わら}った。結局自分が気にすることと言えば、この程度のことしかないのだ。弦が緩いだの音がずれているだの。世の男たちが、派閥内での出世や駆け引きに頭を悩ませているのに対し、自分が気にする事柄の何とつまらないことだろう。

ひっそりと自嘲したセングムの耳に、ふと、沓^{くつ}が土を踏むやわらかな音が聞こえてきた。背後のカルガシュが小さく身じろぎする気配がする。それに振り返るより先に、静かで落ち着いた女の声がかげられた。

「またここにいたな。たまには違う場所にいたらどうなのだ。毎年同じ場所に巣をかける渡り鳥ではあるまいし」

呆れを含んだその声に、セングムは微笑を浮かべた。

「下官の案内がいらず、ようございましょう」

「馬鹿もの。たまには自ら客人を出迎えてみると、私は言っているんだ」

言っただけで彼女は、セングムの隣に腰をおろす。髪にさした簪^{かんざし}が、水晶でできた佩玉^{はいぎよく}が、動きに合わせてさらさらと揺れる。絹の裳裾^{しんきょ}が広がって、布地に焚きしめた香の匂^{にお}いが花が開くようにふわりと広がった。

「王みずから足を運んでやっているというのに。普通なら訪問を受けた側が、すっ飛んで挨拶に出てくるものだぞ」

「それは申しわけございません。なにせ、世間知らずなもので」

ところで、とセングムは言う。

「世間知らずついでに教えていただきたいのですが、普通は国王がたったお一人で、どこかへお出ましになるということがあるのでしょうか？」

「何事にも例外というものはある。第一、あんなうるさい連中を連れて歩くのはかなわん。片っ端から手打ちにしたいくなる。国の安寧と王宮の平穩を願うのなら、王が供を連れずに出歩くのも、ある程度は容認すべきだろう」

悪びれる様子もなく、彼女は シェンジン・タミヤは言い放つ。タミヤとは長女の意味で、シェンジンはシャルハンの先王が一女。すなわち十何代目かの、シャルハンの国主であった。普段は王族の居所である《万麓宮》アルハイ・ノヤに在り、諸官群臣を取りまとめて政を行っているが、ときおり供も連れずに《水離宮》を訪れる。遠く湖の岸辺で、女王の帰りを気をもんで待つているだろう侍従達のことを思い、セングムはつい苦笑した。

「またトー八殿の白髪が増えますね」

「知るものか。あれもいい歳だからな。今さら白髪の一、二本増えたところで別にどうということもあるまい」

侍従長の気苦労をすっぱりと切って捨てると、シェンジンはセングムの手元を覗く。

「どうした、今日は琵琶は弾かぬのか？」

「いえ、少し弦が緩んでいるようなので」

ふうん、とシェンジンは呟き、「貸してみろ」と手を差し出す。

セングムが琵琶を受け渡すと、女王はやや乱暴に弦を鳴らす。音を出してから首を傾げた。

「……さっぱりわからんな。どこがいつもと違うのだ？」

「もっと軽く弾いてみてください。……ああ、そうではなく、こう……そのように弾かれると、爪が痛んでしまいます」

セングムの指示通り、シェンジンは今度は軽く、嫺々と弦をつま弾く。その音は 女王の技巧は考慮に入れないとしても やは

り不安定に感じられた。

「つい先日、調弦をしたばかりなのですが。そろそろ弦の換えどきなのかもしれません」

「ああ、私には皆目違いがわからん」

シエンジンは小さく嘆息する。

「どうも私には、そちらの才はないようだな。幼いころにも何度か言われたことがある。笛は吹くものであつて、人を叩くためのものではないとか」

それは才能以前の問題ではないだろうか。そう思いつつも口には出さず、セングムは黙って琵琶を受け取る。

「よいではありませんか。その代わりに地を治め、民を治める才があるのですから」

言いつつ、それがかつて自分に向けられていた言葉であつたことを思い出す。言われた言葉の内容は、まったく逆のことだったけれど。

針の先で突いたような、痛みとも言えない小さな疼きが、胸の奥をちらりとよぎる。それはむかし怪我をしたところに、何かの拍子に鈍い痛みを感じるような、そういう種類の感覚だった。久しく忘れていた痛みに戸惑いつつ、その戸惑いを面に出さないよう、セングムは琵琶に手をやった。指が弦に触れ、繊細で美しい音色を奏で出す。

しばらく二人とも、何も言わなかった。セングムは琵琶を奏でることに集中し、シエンジンはセングムが奏でる琵琶の音に聞き入っている。異国情緒あふれる、美しいながらも哀しい響のある曲だった。やがて、その最後の一音が宙に消えるのを待ってから、シエンジンが口を開いた。

「この曲は初めて聞いた。なんという曲なのだ？」

「《異邦にひとり》という曲だったと思います。故国にいたころ、幾度か耳にしたことがあるだけなので、はっきりとはわかりませんが」

東方風とも西域風ともつかぬ、その曲調はとても印象的であったため、よく覚えていたのだ。シエンジンは「異邦にひとり、か」とセングムの言葉を繰り返すと、

「まるで今の、お前の状況を指しているかのようなだ」

とひどく平淡な口調で言った。木の洞から響いてくるような、奇妙に虚ろな声に違和感を感じ、セングムは咄嗟に反応し損ねる。

女王の声にセングムを揶揄する調子はない。しかしただ単に、何の気なしに口にした言葉にしては、何かしら単色ならざる色合いが滲み出ているような気がした。シエンジンの言葉の意味するところがわからず、そのまま受け流すべきか、どういう意味か問うべきか、セングムは迷った。けれどセングムが何か言う前に、シエンジンが再び口を開く。

「お前がこの国へ来てから、どれくらいになるのだったか」

「四年です。正確には、四年とふた月」

戸惑いを押し隠して、セングムは答える。

「四年か……もうそんなに経つのだな」

半ば独り言のように女王は呟く。

「それではそろそろ、里心のつく頃合いではないか？」

これにもどのように反応すべきか、セングムには分かりかねた。

シエンジンが何を言いたいのか。あるいはセングムに何を言わせたいのか、はつきりと掴み取ることができない。女王の声は不自然なほど淡々としている。けれど無関心を装った言葉の下に、こちらの真意を探ろうとしている強い意志の存在を感じた。彼女は自分に何かを言わせたいらしい。そのことはわかる。わかるけれど、肝心の「何を言わせようとしているのか」が全く見えてこないのだ。常らしからぬ女王の態度に、セングムは落ち着かない気分になる。

「こちらへ来て最初のころは、そうした感情を抱いたこともありません」

結局彼は、無難な答えを返すことを選んだ。

「ですがこの頃はもう、それほど帰りたとは思いません。そもそも

もが病弱な性質でしたから、祖国にいたところで何かしら役に立つわけでもありませんし……案外故郷では、無駄飯食いがいなくなつたとせいせいしているかも」

「そのようなことがあるものか！」

冗談のつもりで言いさした言葉は、最後まで口にする前に遮られた。

それまでの淡々とした口調とは打って変わって、叩きつけるような激しい声に、セングムは驚いて口をつぐむ。女王は興奮気味にまくしたてた。

「お前をこの国へ連れてきたのは私だ。それを恨みこそすれ、喜んでいるはずがないだろう！ なぜそのようなことを言う？ お前は本気で、誰もお前の帰還なぞ望んでいないと思っているのか！？」

「……陛下？」

セングムに声をかけられ、シエンジンはばつが悪そうに口を閉ざす。激したことを恥じるかのように、小さな声で呟いた。

「すまぬ、怒鳴って悪かった。……だが、私はそうした物言いは好かぬ。自分を貶めるようなことを、安易に口にするものではない」

「……………」

黙したセングムに、重ねてシエンジンは言う。

「お前はさきほど、私に言ったな。楽の才はなくとも、地を治める才があるのだから、それでいいと。けれどそれはお前にだって当てはまるはずだ。違うか？」

セングムは返事をしない。二人の間に、しばし不自然な沈黙が流れた。

やがて女王は立ち上がり、そのまま小亭を出て行った。おそらく《万麓宮》へ戻るのだろう。棧敷まで見送ろうと立ち上がりかけたが、女王の背に拒絶の気配を感じ取り、セングムは力なく腰を下ろす。今日は何かがおかしい日だ。齟齬感の原因はシエンジンにあるのか、それとも自分にあつたのだろうか。

「無駄飯食いだと思う人間を、離宮に住まわせてやるほど、私は酔

狂な女ではない」

出て行きざま、シエンジンは振り返らずに言った。

「私はお前の琵琶の音が好きだ。……そのことは覚えておけ」

それだけ言って衣擦れの音が遠のいていく。セングムは琵琶を抱えたまま、じつと押し黙っていた。シエンジンが去った小亭には、気づまりな沈黙の残り香がまだ漂っている。

……あなたはそのままでもいいのよ。

その沈黙の隙間を縫って、記憶の彼方から懐かしい声が囁きかけてきた。

あなたは笛や琵琶を能く使う。それでいいではありませんか。

（ええ、わかっています）

あなたがわたしを受け入れてくれたことも。

ありのままのわたしを慈しんでくださることも。

シエンジンにか、記憶の声にか、セングムは心の中で答える。

（けれど、）

そのままでもいいと、あなたは言ってくれるけれど。

楽の才があるのだからと、あなたは言ってくれたけれど。

（けれど……）

（でも、わたしは ）

小亭の中を微風が吹きぬけ、セングムの頬をそつとなでてから、虚空に消えていった。

第二話

シエンジンが《水離宮》を訪れてから五日後の夜。セングムは久しぶりに夢を見た。

切れ切れに見る夢は、時も所も違ったが、全て故国の夢だった。まず夢のなかには母が出てきて、やさしい声でセングムに語りかけた。

まあ、きれいな音なこと。セングムは本当に上手に琵琶を弾くのね。

頭を撫でてくれる温かな感触が嬉しくて、何より母が喜んでくれるのが嬉しくて、セングムは琵琶をかき鳴らす。その旋律の向こうから母の声が聞こえてくる。歌うように。慰めるように。

わたしの愛しい子。例えば体が不自由でも、あなたには神様がくれた才能があるのよ。

ふいにその声も旋律もかき消えて、次には兄の声が聞こえてきた。誰かを叱責している。セングムではない。彼が馬に乗ることを許した馬丁をだ。

落ち方が悪ければ、首の骨を折っていたかもしれないのだぞ。そうだった。兄の馬にどうしても乗ってみたくて、厩舎の管理をしている老爺に頼みこんで乗せてもらったのだ。けれどなにぶん初めてのことで、勝手がわからず、体の均衡を崩して落馬してしまった。怪我は打ち身でいどで済んだが、それを知った兄は怒った。セングムが自分の馬に乗ったことではなく、彼を馬に乗せた老爺に對して。

まったく何を考えているのだ。こんな子供を馬に乗せるなど。老爺が謝罪する声が聞こえる。その声に胸が締めつけられた。自分の軽率な行いがどのような結果を招いたのか。そのことに思い当たり、罪悪感が胸を刺す。

ごめんなさい、ハノルを叱らないでください。

必死に兄に訴えると、兄は言った。憐れむように。宥めるように。

お前の体は普通と違うのだから、もう馬に乗ろうなどと思っ
てはいけないよ。私たちには何でもないことでも、お前にとっては
ひどく危険なことになる。そういうことが、いくらでもあるのだ。
お前が怪我をすれば皆が悲しむ。いいね、約束しておくれ。もう二
度と、危ないことはしないと……。

兄の声が闇のなかに遠のき、妹の声が近づいてくる。

兄さま、兄さま。

まあ兄さま、だめよ。そんなことしないでいいわ。わたしが
代わりにやりますから。

明るく朗らかな声は、主人に懐く仔犬のように、セングムの周り
を跳ねまわる。

何もしなくていいの。

兄さまは、何もしなくていいのよ。

だって兄さまは、笛も琵琶も笙も、王宮で一番巧いんですも
の。

だから、できないことがあったってかまわないの。

そうだろうか。

そうよ。

そうかもしれない。けれど……。

答えたのは、妹のものとは違う太く低い声。

お前は何も心配せずともよい。ことは父や兄達に任せておけ
ばよいのだ。わたし

父親の声だった。国はいま、隣国シャルハンと領土のことで揉め
ている。かの国と戦になるやもしれぬと、その噂がセングムの耳に
も届いていた。シャルハンの兵は精強、その国土こそ大きくはない
が《武の強国》ヤイラ・イエーンとして近隣諸国に名を轟かせている。和するにせよ
戦うにせよ、自分にも何かできることはないかとセングムは父王に
打診したが、父親の返答はそのようなものだった。

何もしなくていい。何も。誰かが代わりにやるから。お前には危

険だから。お前には無理だから。

武芸を嗜めずとも政治に疎くても、代わりの才があるのだから、それでいいではないか。

だから何もなくていい。何かをしようとしなくていい。人並みのことがなに一つできなくなつて、そんなことは誰も気にしないから……。

闇の中からかけられる言葉が、善意と慈愛とで成り立っていることは知っている。けれどもセングムは、その声に向かって叫び出したい衝動を覚えた。何を叫びたいのか自分でもわからない。何かを訴えたくて仕方がないのだが、訴えるべき言葉は彼の中に見つからない。ただ様々な感情。それは感謝でもあり、苛立ちでもあり、喜びでもあり、怒りでもあり、安堵でもあり、焦燥感でもあり、満足でもあり、諦めでもある、相反する感情がぶつかりあい、せめぎ合つて、出口を求めて荒れ狂っていた。

何もしくなくていい、と囁き続ける厚い闇に、セングムは「でも」と言葉を発する。しかしその先が続かない。でも、でも、でも、と駄々をこねる幼子のように同じ言葉を繰り返すだけだ。

そうしているうちに、聞き覚えのない囁きが暗闇の向こうから聞こえてきた。

（お可哀そうに、気づけなかったのですね……）

（……は、その……を隠すために……）

（まさか……に……）

軽い金属が落ち、床を転がっていく音がする。そして誰かのすすり泣く声。

（これはもう、二度と……）

甘く濃厚な匂いが、どこからともなく漂ってきた。

セングムは目を開けた。

最初は自分が目覚めたことに気づけず、家族の姿を探して視線をさまよわせた。けれど一瞬の後には、ここがどこであったか、波が

打ち寄せてくるように記憶が戻り、セングムは全身の力を抜く。ゆるく吐き出した息は、音もなく闇に吸いこまれていった。

祖国の夢を見た後の、安堵とも落胆ともつかない、形容しがたい感情が胸の奥でわだかまっている。普段は諦観と共に受け入れている記憶は、夢の中では鮮烈で生々しい感情を伴って甦った。それが不思議で、少しだけ疎ましい。もう一度息を吐き出し、寝返りを打って姿勢を変える。室内の闇は濃く、黒というより紺に近い色合いをしている。

その暗がりの中から、甘い香気が何の前触れもなく漂ってきた。はっと目を見開いたセングムの耳に、木板が軋む微かな音が届く。房室の入り口に立てられた衝立の向こう　そこで扉の開く気配がした。寝台に横たわったまま息をひそめ、闇の帳の向こうに意識を凝らしていると、本当にかすかに、衣擦れの音が伝わってきた。そして全身を包みこむような、濃く甘く香る不思議な芳香……。

誰かが、房室へ入って来たのだ。

けれど、いったい誰が？

《水離宮》の奥深く、しかもこのような夜半に房室を訪れる者など限られている。護衛のカルガシュか、あるいは下官の長か。けれど彼らにしたところで、無断で寝所に立ち入るような不躰な真似をするはずがない。それは他の護衛や下官にも言える。何かセングムに用があるのなら、まずは戸口から声をかけ、入室の伺いをたてるはずだ。そも部屋に入って来た何者かは、灯りさえ携えていない。房室の闇はそのままに、ただ何者かの気配だけが、微風が薄布をそよがせるように室内の空気を微動させている。

着物の裾が床をこする音が聞こえた。それは衝立を通り過ぎ、部屋を横切って、セングムのいる寝台へ近づいてくる。不安と焦りが胸の中で激しく震え、その一方で体は冷たく硬直していく。相手が誰であれ、まっとうな理由で房室に入ってきたとは思えない。護衛達はどうしたのだろう。セングムの寝所へ来るには長い廊下を通らねばならない。廊下に窓や扉はなく、入口では衛士が不寝番を

している。しているはずだ。であればそれが何者であれ、護衛の目をかいくぐって房室へ来ることは不可能なはず。するとやはり、これはカルガシユか誰かなのだろうか？

衣擦れの音がはつきりと聞こえる距離にまで、誰かは近づいてきた。セングムは咄嗟に目を閉じ、ちがう、と心のなかで呟く。これはやはりカルガシユではない。誰か、まったく違う別の人間だ。確たる証左あつてのことではなかったが、直観的にそう感じた。相手はこちらが眠っていると思つたのか、上から顔をのぞきこんでくる互いの息遣いさえ聞こえてきそうな、重苦しい静寂が寝台の上に落ちた。セングムは息をひそめ、全身の神経を針のように尖らせて、相手の動きに意識を凝らし続けた。

すつと頭上の空気が動き、なにか粉をこぼすような、さらさらという音が聞こえてきた。それと同時に、まるで無形の風でも吹いたように、甘い匂いがむつと押し寄せてくる。その香気のあまりの強さに、セングムは思わず咳きこみかけた。咽喉の奥に不快な疼きを押しやったが、芳香は次第に濃さを増していく。目眩がしそうなほど濃厚な香りに耐えながら、セングムはふと、その香りが記憶の奥深くをかすめていくのを感じた。水面に生じた水流^{ながれ}の変化が、水底に沈んだ塵芥を徐々に巻き上げるように、押し寄せてくる香りは記憶の底に沈んだ何かを浮かび上がらせようとしていた。

しかしそれに気を取られたせい、セングムはこらえきれずに、とうとう小さく咳をもらしてしまった。静かな室内に、その音は予想外に大きく響く。寝台を囲む凝固した空気に瞬時に亀裂が入った。寝台の脇に立つ何者かは声こそあげなかったが、驚き、息をのむ気配がありありと伝わってきた。侵入者はすばやく身を翻すと、衣擦れと軽い足音を残して扉から出ていく。セングムは目を開け飛び起きたが、既に相手は影も形もない。闇の中に手を伸ばし、天井から垂れさがっている房のついた綱を引くと、鈴を鳴らす澄んだ音が壁の向こうに遠く聞こえた。護衛の詰所に通じる綱をセングムは引っ張つたのだ。

間もなく、先刻の足音とは明らかに異なる、重みを感じさせる足音が戸口へ近づき、聞きなれた声が外からかけられた。

「セングム様、何事ですか？」

低く落ちついた声に、セングムの肩から自然に力が抜けていく。そのとき初めて、自分の体がどれだけ強張っていたかに気づいた。とりあえず入ってくるよう促すと、戸口からカルガシュと、灯りを持ったもう一人の護衛が現れた。蠟燭の小さな灯りも、闇に慣れた目には随分とまぶしい。セングムは目を瞬かせながらカルガシュに問いかけた。

「今夜はあなた方が不寝番を？」

「はい。宵の入りからずっと」

では、とセングムは質問を重ねる。

「さきほど誰かが、わたしの寝所へ来ませんでしたか？」

「　　？　いえ」

とこれには歯切れの悪い答えが返る。カルガシュの声には困惑が淡く滲み出ていた。

「誰も来ておりませんが……」

「ひとりも？　護衛や下官も含めて？」

「ええ」

カルガシュの返答に、今度はセングムが困惑する番だった。もう一人の護衛は何も言わないが、これはカルガシュと同じ意見であるためだろう。何か反論しようとして、しかし結局言葉が見つからずに口ごもる。

先刻の出来事が夢だったとは思えない。夢だったとは思えないが、ここに誰かがいたという証拠は何も残っていない。あれほど強く香っていた匂いは、いつの間にか消えており、それを論拠に誰かがいたのだと訴えることは不可能だった。

第一、ここに誰かいたとして、その人間はどうやって房室から消え去ったのだろう。隠れる場所も逃げる場所もないというのに。カルガシュに見つからずに部屋へ忍び込み、そしてそこから逃げるこ

となどできるのだろうか。けれどだからと言って、カルガシュが嘘をついているとは考え難い。第一、嘘をつく理由がないではないか。黙りこくってしまったセングムに、カルガシュが氣遣うような声をかける。

「失礼ですが、何かあったのですか」

少し逡巡してから、セングムはありのままのことを話した。

「ここに、つい先程まで、誰かがいたような気がするのです。目を覚ましたらとても甘い匂いが漂ってきて、何事かと思っていたら戸の開く音がして、それで」

セングムはカルガシュの足元を指した。

「そこに誰かが立って、わたしの顔をのぞきこんできたのです。もちろん直に見たわけではなく、そうした気配を感じただけなのですよ」

「匂い、というのはどのような？」

「嗅いだことのない匂いです。いえ、実は数日前にも、夜半に似たような香りを嗅いだ覚えがあります。そのときはあまり気にとめていなかったのですが……香の匂いとも花の香りとも違う、とても強く甘い匂いでした」

言いつつ、こんなことは何の参考にもなるまい、とセングム自身思った。神妙に話を聞いていたカルガシュは、とりあえず宮の中を調べてみることに、その中に強い香りを身に帯びている者がいれば連れてくることを約束し、他の衛士たちに指示を出すため部屋を後にした。その後すぐに、入れ替わるようにして下官がひとり部屋へやってくる。下官は温かい飲み物をセングムに勧め、水差しの水を変え、心を落ちつける効能があるという香を焚く。その扱いからして、どのような報告が行ったのか想像はついたが、それを怒る気にはなれなかった。セングムとて、他人からこのような話を聞かされれば、悪夢でも見たのだろうと結論づけてしまうだろう。

せめて不審な者が見つかれば、と思うが、その望みがかなう可能性は薄いだろうと彼自身にもわかっていた。案の定、離宮に不審な

人物は見つからず、セングムが言ったような強い甘い匂いをさせている者も誰ひとりとしていなかった。

第三話

ほとんど眠れないまま一夜を明かし、迎えた翌日は朝から雨だった。雨はそのまま降り続け、午後に入ってから勢いを増し、次第に雷雨の様相を呈していく。涼台から冷えた外気が吹き付けてきて、セングムは小さく身震いした。

大粒の雨が地面を叩き、その飛沫が地表に冷気の層を作っている。屋根の庇からは雨水が滴り、何かの拍子に大量の水がこぼれ落ちて、まるで水を撒いているような騒々しい音を立てる。そこに遠雷の音が加わり、午後の陽ざしに照らされるはずの庭は、ときならぬ喧騒と薄暮のような薄闇に沈み込んでいた。

これでは院子へは出られそうもないな。

寝不足ですっきりしない頭を振って、セングムは小さく溜息をこぼす。荒れた天気は憂鬱な気分には拍車をかけた。明るいい日差しのもとでなら、単なる悪夢と思えたかもしれない昨夜のできごとは、くすんだような空の下にあって、ますます薄気味悪く思い出された。迷信的な恐怖心が心臓をつつき、セングムは肌が泡立つのを感じた。まさに悪夢に怯える子供のような想像が あれは生きた人間ではなかったのではないか、という考えが脳裏を横切る。

(馬鹿げてる……)

女子供のような怯え方をする自分自身を笑おうとしたが、それはうまくいかなかった。あれが生きた人間であつたならば、余計に不可解で不気味なできごとであることに、今さらながら思い至ったからだ。

あれは何者で、いったい何が目的で部屋へやってきたのだろう。

そしてどうやって、セングムの寝所に入りにできたのだろう。誰にも気づかれずに。

カルガシユが見逃した、ということは考えづらい。ではカルガシ

ユが嘘をついているのだろうか？ それこそ更に考え難いことだった。あり得ないことだと言ってもいい。あの忠実な護衛が、セングムに対して虚言を用いるなど考えられなかった。

（では、もしかすると夢だったのか）

それは昨夜から、何度も自分に言い聞かせようとした言葉だった。けれどその度に、ありえない、と頭の隅で声が囁く。あのとき自分は確かに目を覚ましていた。戸が開く音を聞き、衣擦れの音を聞き、不可思議な甘い匂いを嗅ぎ、何者かの気配を感じた。あれが夢であつたはずがない。しかしそれならば、カルガシユの言葉の説明がつかない……。

思索の堂々巡りを繰り返していると、雨が地を打つ喧騒を縫って、何やら慌ただしい気配が伝わってきた。足音と人声が涼台の外、庭の向こうから聞こえてくる。距離があるため言葉の内容は聞き取れないが、どこかただならぬ様子は伝わってきた。

何事か、と外を窺ったとき、折よく一人の下官がセングムの前を駆け抜けようとした。セングムが呼び止めると、着衣をずぶぬれにした男は雨のなかで立ち止まる。

「何やら騒がしいですが、どうかしたのですか？」

「は、実は……」

下官は頭を下げて答える。

「船着き場の方で妙なことが起こりまして」

「妙なこと？」

「死んだ魚が流れついているのです。それもかなりの数が」

セングムは眉をひそめる。

「鳥か獣に襲われた、とか？」

「そうではないようです。もしそうだとすれば、死体を残していく理由がありますまい。そも数が多すぎます。中毒死のようにも見えませんが、毒で死んだ禽獣に特有の臭気もなく、原因がはっきりしておりません。とりあえず、雨が止んでから岸に使いを出そうと相談していたところですが……あ、この宮の水には湖の水は用いて

おりませんゆえ、どうかご安心を」

「　　そうですか」

下官は一礼して走り去っていく。残されたセングムは、下官の言葉
を反芻していた。

中毒死。

船着き場で。大量の魚が。

雨音は一層激しくなり、低く垂れこめた雲の隙間から、巨大な車輪が転がり落ちるような音が轟いた。この国では、雷は《雷虎》^{グオ・ファン}という神獣が起こすのだと伝えられている。《雷虎》は身に稲妻を帯びて天を駆け、地上の虎と同じく、縄張りをめぐって互いに争う。その呻り声が雷鳴となり、閃く爪や牙の輝きが雷の一閃となるのだという。

《雷虎》の怒りが高まりつつあるのか、地響きに似た音が再び天上で轟いた。重い音が鼓膜を叩き、体の芯まで震わせる。すると、まるでその振動に呼応したように、セングムの脳裏で唐突にその記憶がよみがえった。

（毒は……）

（　　強い毒は、その匂いを……）

（匂いを隠すために、別の強い香りをつけて　　）

忘れ果て、とうに朽ち果てたはずの記憶がまざまざと甦る。セングムは棒を呑んだように立ち尽くした。

空の一角に閃光が走った。一呼吸分の間を置いて、耳をつんざく雷鳴が響き渡る。しかしセングムは微動だにせず、石でできた彫像のように、蒼白い顔をして固まっていた。

では、あの匂いは……。

あの匂いの正体は。

けれどなぜ。第一、だれが？

そうだ。そもそも「あれ」を持って来たのは誰だったのだろう。

この離宮に外から侵入することは至難の業だ。ではやはり離宮の内部の人間が　まさかカルガシュが？

「ありえない」

われ知らず、セングムは呟いていた。その声はあまりに弱々しく、降りしきる雨の音にかき消され、呟いた本人の耳にも届かなかった。しかし他の誰が、護衛の目を欺いて寢所へ来ることができただろう。カルガシユが見逃さない限り、寢所へ出入りすることは不可能だ。彼が見逃す人間など、無断で離宮に出入りできる人間など、いるはずが。

ない、と思うとしたその刹那、ひやりと冷たい予感が胸に走った。身を翻した魚の鱗が、瞬間鋭利な光を放つように、一瞬のうちにひらめいたその予感。しかしその残像は焼きつけられ、時間が経つにつれよりはっきりと鮮明になっていった。

(……いる)

ひとりだけ、いる。

カルガシユが、護衛たちが、侵入に気づけない人間が一人だけいるではないか。

頭の芯が、そこに氷柱を差し込まれたかのように冷えていく。思い当たったその答えに、全身から血の気が引いていくのがわかった。

(けれど、なぜ)

何故あの人が。

暗い空に再び閃光が走る。猛々しい神獣たちは、密雲の上で荒れ狂っているようだった。

「今宵は寢所の警護は必要ありません」

夕刻、セングムはカルガシユにそう言い渡した。

考え抜いた末の、それが彼の結論だった。

「他の衛士の方々にも、この旨お伝えください」

最良の結論ではない。最善の選択でもない。そのことはわかっている。わかっていて、セングムは敢えてその結論を選んだのだ。

カルガシユは最初なにかを言いかけたが、見えない手に抑え込まれるように口を閉ざした。その沈黙が意味するところは、苦渋か、

戸惑いか、迷いか、諦めか。

しかしこの忠実な護衛が、セングムの命に背くことは決してないのだ。そのことがわかっていたから、セングムは返事を待たずに彼に背を向け、宮の奥にある自室へ戻った。

陽が沈んで後も、雨は途切れることなく降り続けた。昼と夜の境は曖昧なまま、それと分からぬうちに時刻は闇の領分となる。

みつしりと密雲に覆われた空は暗い。そして地上はさらに暗かった。窓を閉ざし、灯りも消した部屋の中は、墨を流しこんだような暗闇に包まれている。闇そのものが緞帳となっているのか、外の雨音は奇妙に遠い。耳を真綿で塞いだような静寂のなか、セングムは椅子に座し、そのときが来るのをじっと待っていた。

真の闇は時間の感覚だけでなく、上下左右の感覚も奪う。自分の輪郭さえ闇に溶け、すっかりとした存在を保っていることを意識するのが難しい。それは船に乗ったときの感覚に似ていた。船板一枚隔てた先に、膨大な水と底知れぬ深淵を感じ、体の芯がそちらへ抜けおちてしまったような、ひどく心もとない感覚に。

考えてみれば、この離宮も巨大な船のようなものだった。陸地から切り離され、広大な湖の上にぽつねんと浮かぶ、静かで大きな寂しい船。

そうしてどれくらい経った頃だろうか。セングムは顔を上げ、戸口の方を見た。

扉も、扉の前に立つ衝立も、闇に塗り込められて見ることができない。けれどセングムの視線は、衝立も扉も見透かして、扉を隔てて佇む人物をはっきりと捉えていた。息を殺し、じっとこちらを窺う気配が、暗い色をした空気をかすかに帯電させている。糸をぴんと張ったような沈黙が、室内と室外の二人の人間の間に差し渡された。互いが互いの気配を窺うその緊張感に、空気が両方から引っぱられているかのようだった。

しかしその沈黙も長くは続かなかった。

セングムは自ら、緊張の糸を断ち切った。

「どうぞ、お入りください」

こちらが起きていることを半ば予期していたのだろう。戸口にたたずむ相手に、驚いた様子はなかった。しかし驚きはしなかったものの、戸惑ってはいるらしく、相手はなかなか部屋に入ってこようとしなない。

再び沈黙が流れ、屋根を打つ雨音が少し強まり始めたころ、ようやく軋む音を立てて扉が開いた。室内の闇が、やわらかな光に気圧されたように退いてく。衝立の裏から、燭台を手にして現れた人影を、セングムは目を細めて見やった。

「……お前のことだから」

低く、掠れた声でその人は言った。

「勘付いただろうとは思っていた」

さらさらと、衣が床を擦る音。それは上等な絹の衣が立てる音だ。相手の言葉に、セングムは頭を振る。

「はつきりと分かっていたわけではありません。ですがカルガシユが……」

「カルガシユが、私のことをしゃべったのか？」

「いいえ、彼は何も言いませんでした。けれど、それでかえって、察しがついたのです。カルガシユが嘘についてまで庇い立てせねばならない相手。そのようなお方は、お一人しか思いつかなかったのです」

静かな視線を向け、セングムは彼女の名前を呼んだ。

「シェンジン陛下。貴女さま以外に」

彼女は、シャルハンの国主シェンジン・タミヤは、ため息とも呻き声ともつかない声をもらした。手にした灯りが頼りなく揺れる。それはそのまま、シェンジンの心の揺らぎを表しているかのようだった。

「確かに、そうだな」

自嘲と呼ぶにはあまりに苦い、苦渋を多分にはらんだ声で女王は

言う。

「護衛たちが侵入に気づけぬ相手は……気づかなかったふりをせねばならない相手は、私の他におらぬな」

第四話

末の公子をシャルハンに居らしめよ。

その命令を聞いたとき、母はこの世の終わりのように嘆いた。

祖国はシャルハンと矛を交え、結果、大敗を喫することとなった。かねてより領有を争っていた土地は奪われ、さらに王族のひとりを入質として差し出すよう求められた。白羽の矢が立ったのは、兄でも妹でもなく、王宮の奥にこもっていたセングムだった。

なぜセングムが選ばれたのか。その理由を知ったとき、彼の家族は驚き怒った。特に母親の悲憤は尋常ではなく、シャルハンに赴くセングムの方が、母を慰め宥めなければならぬ有様だった。母は我が子を手放さなければならぬことに泣き、戦に敗けたがゆえの運命を嘆き、非情な命令を下したシャルハンの王を呪った。

「あんな娘のもとに、あなたが行くだなんて……！」

あんな娘、というのは、当時まだ王女の位にあったシェンジンのことだ。母はシェンジンをも嫌いしていた。いや、憎悪していた、と言ってもいい。その敵意は灼けた鉄のような灼熱の冷たさをはらんでおり、相手が敵国の王女であることを差し引いても、度を越しているように感じられた。常日頃は穏やかでやさしい母親が、シェンジンに対しては怨詛の言葉を毒のように滴らせる。小鳥の卵を拾ったつもりが、孵ってみれば毒蛇だったような、そういう種類の不気味さを母に対してセングムは感じた。

しかしセングムは、母がシェンジンを憎む理由を、父や兄達や妹がシャルハンの王女を疎む理由を、終ぞ理解することはできなかった。それはセングムには理解できないことだった。そしてだからこそ、シャルハンには彼を入質に選んだのだ。

家族と別れた日のことを、セングムははっきりと覚えている。故国を離れるつらさもあった。けれどそれ以上に彼の心を占めていたのは、喪失感に似た虚しさだった。

彼と彼の家族は、とうとうお互いの距離を縮めることができなかったのだ。打ち寄せて来る悲嘆の声に、真の言葉は押し返され、咽喉に詰まって萎びていく。どのような形であれ、自分が国の役に立っているのは嬉しいのだと、そう口にすることはどうしてもできなかった。セングムと家族の間にある断裂が、深い亀裂から吹き付けて来る乾いた風が、言葉をさらってかき消してしまふことが分かっていたから。

柱にかけられた灯火が、室内の人間の横顔を照らしている。

シエンジンとセングムは、小卓を隔てて座っていた。シエンジンの体からは雨の匂いと、沁みついて取れなくなってしまったのか、かすかに甘い香りが漂ってきていた。まるで彼女の罪の証のように「これは、ハミの花の匂いですね」

女王が何も言わなかったため、セングムの方から彼女に話しかけた。

ハミの花 「破身の花」とでも書くのか。夏の一時期のみ高山に咲く珍しい花だ。花卉は薄く小さいが、とても強い甘い匂いを発する。香気は水に触れると弱まってしまふが、花卉を乾かして粉末にすれば、腐臭や悪臭を消す匂い消しとなる。

「普通に匂い消しとして使われることもありますが、古来よりこの花は、独特の臭気をもつ毒物の匂いを消すためにも用いられたそうです」

ハミの粉末を用いれば、どんなに強い悪臭でも、ものの見事に隠されてしまう。ゆえに暗殺者たちは、何者かの毒殺をもくろむ場合、好んでハミの花を匂い消しに用いた。これによって、本来は無害であるはずの小さな花は、身を滅ぼす「破身の花」として恐れられるようになったのである。

「わたしの国の王宮には《香師》という役職がありました。特別な訓練を受けた者達で、料理や飲み物の匂いを嗅ぎ分け、毒物が紛れこんでいないか調べるのです。その彼らが一番最初に教えられるのが、ハミの花の匂いだといいます」

セングムはシェンジンの方を見た。

「わたしも昔、《香師》からハミの匂いを教わりました。教わったのは本当に昔のこと、今日この日まで忘れていましたが」

シェンジンは何も言わない。冷たさも温かさもない、硬い殻のような沈黙に身を閉ざしている。その表面をそつと撫でるように、セングムは慎重に言葉を発した。

「陛下。なぜハミの花を　花の匂いをつけたものを、わたしの部屋に持ち込んだのか、教えていただけませんかでしょうか」

「……いまさらそれを聞くのか？　もう分かりきっていることだろう」

殻の隙間から、淡々としたシェンジンの声が返る。声には、本当にわずかだが、抑えつけているような調子があった。内心の激しい感情を抑え込もうとしているのだろう。つつけばすぐにでも溢れ出しそうな女王の激情を感じながら、セングムは控えめに食い下がる。「あなたの口から直接教えていただきたいのです」

再び沈黙が落ち、古い毛布のように居心地悪く二人を包む。雨の音が、また少し強くなったような気がした。シェンジンの答えを待ちながら、セングムは湖に落ちる無数の雨粒のことを考えた。闇を映す鏡のように暗く透き通った水面と、その表に着水して波紋を広げる水の粒。どんなに雨が降り注ぐと、揺れるのはほんの表面だけ。湖の底は静まり返り、外のことなど頓着せず、しんと闇の微粒子を降り積もらせている。

「お前が思っている通りのことだ」

シェンジンの声にセングムは我に返る。

「私はハミで匂いを消した毒で、お前を殺そうとした」

抑揚を欠いた声が、そこだけ切り取ったように部屋のなかに浮かび上がった。

告白の言葉は胸に冷たく沁み込んでいく。心を凍らせるほどではないが、溶けたばかりの雪解け水に似た冷たさが胸の奥に流れ、凝った。衝撃も恐怖も感じなかったが、それはあらかじめこの答えを

予測していたためだろう。離宮を囲む湖のように、冷たく静まり返っている心を、セングムは他人のもののように感じていた。

「毒は水差しに入れたのですか？」

セングムの問いかけに、エンジンが頷く。

「そうだ」

カルガシユが下官に命じて、水差しの水を変えさせたのはこのためだったのか。

「そして残った毒は、船着き場から湖へ捨てた？」

「いや。全て水差しの中に入れた」

「ではどうして　ああ、下官の捨てた水が湖に流れ込み、それで魚が死んだのですね。けれどハミの粉末のせいで、死んだ魚達からは腐臭が消えてしまっていた」

そんな必要はないのだが、セングムは口に出してこれまでのことを整理した。そうしていないと、何かしゃべっていないと、停止した空気の膜に包まれて身動きがなくなってしまうような気がしたからだ。琥珀に閉じ込められた虫のように、朽ちることすらかわず、干からびて凍てついた存在に。そうならないために、セングムは核心に踏み込み、固まりかけた樹脂のような空気を打ち砕くことに決めた。

「なぜ、わたしを殺そうとしたのか、お聞きしてもよろしいでしょうか」

エンジンが息をのんだような気がしたが、定かではない。彼女は今度も即答しなかった。沈黙の圧力に停滞しかけていた空気にひび割れが生じている。セングムはひびに爪の端をかけ、軽く揺さぶってみた。

「わたしは何か、陛下のお気に触ることをしたのでしょうか」

「ちがうつ！！」

鋭い返答が返る。突如として発条おはのように弾けた女王の激情に、セングムは反射的に身をすくませる。しかしエンジンは、セングムのことなど目に入らぬと行った様子で激しく首を振った。

「ちがう、ちがう、ちがう！ お前のせいなんかじゃない！ ぜんぶ私が原因なんだっ、お前に落ち度なんてひとつもないんだ！ 全ては私の利己心が為したことだ、分不相応のものを望んだりするから、こんなことになってしまったんだ！」

シエンジンのあまりの取り乱し様にセングムは言葉を失う。悲鳴のような声を聞きながら、いつか母に感じたような、憐憫と空恐ろしさが入り混じった感情が胸をかすめた。《水離宮》が造られた理由を思いだす。心を病んだ后、発狂した王妃の逸話。過去の亡霊が遺した狂気を、部屋の空気に嗅ぎ取った気がした。

しかし、女王はやがて落ちつきを取り戻し、深く苦しげに息をついた。苦悩の蔭を落とした声を、震える息を共に吐き出す。

「……すまない……見苦しいところを見せた……」

はいともいいえとも答えられず、セングムはただ首を振った。どういう意味で振ったのかは自分でもわからない。シエンジンはもう一度、覚悟を決めるように大きく息を吐く。

「先日、お前の故国^{くに}から使者が参った」

シエンジンの話は唐突に始まり、最初セングムは、何を言われたのかわからなかった。

故郷からの使者。珍しいこともあるものだ、と思った。戦の後、両国は和睦を結んだものの、国交は断絶しているに等しい。祖国がシャルハンへ使者を送ったというのは初耳であるし、おそらくは五年前の戦以来初めてのことであろう。

「使者と面会したのは私だが、彼らの用件はお前に対してのものだった」

「わたしに？」

セングムは訝しげに眉をひそめる。シエンジンは、まるで宣託を告げる巫女のように、堅く無機質な声調で言った。

「使者の用件はこうだ……『よい医術師が見つかった、ついでに人質として差し出した公子を一度こちらへ帰してほしい。それが無理なら、医術師をこちらへ遣るから、治療にあたらせてほしい』と」

「何故そのようなことを。わたしはどこも悪くありませんが」

「わからぬのか？」

女王の声が震えた。笑いだす寸前のように、泣きだす前触れのよ
うに、奇妙に上ずっている。

「彼らは、お前の目を治してやれると言っているのだよ、セングム」
天空の猛虎が、すさまじい怒りの咆哮を轟かせた。

轟音が宮の真上で鳴り響き、それが転がる様に消えていくと、静
寂のなかに雨音がよみがえる。そういえば雨が降っていたのだった
と、そのときになってようやく思い出す。

セングムは全身の動きをとめ、シェンジンの方を瞬きもせずに見
つめる。

見開いた瞳には、壁にかかった灯火の光が滲むように映っている
だけ。

彼の青みがかった瞳には、他に何も映らず、何も見えていなかった。
た。

第五話

セングムが視力を失ったのは四つの頃だった。祝いの席で口にした杯に、ハミの香で臭いを消した毒が混入されていたのだ。

犯人は内籍の男だったそうだが、彼がなぜ凶行に及んだのか、詳しい経緯は知らない。セングムは半月にわたり高熱に苦しめられ、どうにか命を繋いだものの、代わりに視力の大半を失った。以来彼の世界は淡い黒白のなかに沈み込み、明暗の差は感じ取れるものの、物の形や色彩を見てとることは不可能となった。

まだ何もわからない、幼い時分に見えなくなったせいか、見えないうことが不便だとか特別不幸なことだと感じたことはない。かつて見えていた世界のことはとうに忘れてしまったし、耳で聞くもの、肌で感じるものからも、様々なことを知ることができた。周りの者達がどう思っているようと、セングム自身は、弱視であることそれ自体をあまり気にしてはいなかったのだ。……気に病んでいたのは、もつと別のことだった。

だから、目を治せるのだと言われても、乾いた井戸に小石を投げ込んだかのように、心は虚ろな音を返してよこしただけだった。それよりも、そのことがどうして水差しに毒を注ぐことにつながるのか、そちらの方がずっと気になっていた。

「私はお前の目を治させたくなどない」

半ば呻くような女王の声がした。彼の目には、白っぽい灯りのなかに淡い影が見えるだけだったが、セングムはシェンジンの方に視線を向ける。影の中かから聞こえる声には、苦痛と煩悶が黒い縞模様となって浮き出ている。

「目が見えるようになれば、お前は私を嫌うに決まっている」

「何故そのように思われるのですか」

「私が」

ひゅっと思を吸う音がした。

「私が醜い女だからだ！ 目が見えるようになれば、きっとお前は私を嫌う。醜い私に囚われた、自身の身の上を忌まわしく思うに違いない。そうやっては私は、もうお前の楽の音を聞くこともできぬ！」

「何をおっしゃって……」

「ああ、お前にはわかるまい。私がどんなに醜い女か、どれだけ醜怪な容貌をしているか、お前には決してわからないだろう。色も光もない世界を見ている瞳には、私の醜さは映らない。お前自身の美しさも映らない。だから私はお前を望んだのだ。けれど」

堰を切ったように、シエンジンは止めどなく言葉を吐きだす。

「その目に光が射しこめば、いったい何を映すようになるのか、それを考えるだけで私は気が狂いそうになる！ 業火に焼かれた女の顔が、どれだけおぞましいものかお前は知らぬだろう。焼けただけた肉は歪み、唇は引きつって閉じること叶わず、悪鬼のような形相が常に私の顔を覆っている」

ふいにシエンジンは、激しく椅子を蹴って立ち上がった。椅子が床に倒れるけたたましい音が響き、セングムの首をシエンジンの手が掴む。そのまま顔を上向けさせられた。シエンジンの強い視線を頬の辺りに感じる。

「……私がこうして覗き込んで、目を逸らさずにいられるのはお前だけだ。この瞳が曇りなく透き通っているのは、お前が世の醜きもの、穢らわしきものを見ることがないからだろ。だが、一度目にしてしまえばどうであらうな。お前の目は逸らされたまま、もう二度と私を見ることはないやもしれぬ」

「陛下、」

努めて落ちついて、静かな声でセングムは呼びかける。女王の手に己の手を重ねると、手のひらの下で、やわらかで冷たい皮膚がぴくりと動いた。

「例えわたしの目が治るのだとしても、わたしはもう祖国へ戻るつもりはありません。わたしは和睦の証として陛下に献上された身、

二度と故郷の地は踏まぬつもりでここへ来ました。そして……捕虜の身でおこがましいことではございますが、わたしは陛下をお慕いしているつもりです」

セングムはそつとシエンジンの手を握った。

「陛下の側におります。貴女がお許し下さるのなら、これからもずつと」

重ねた手と手の温度は、しかしひとつに交わることはなかった。シエンジンの手は冷たく冷え切っている。皮膚の下に冷水が流れ、それが徐々に染み出してきているように凍えている。やがてその手が、力を失ったかのようにするりと引き抜かれた。掠れた声がセングムの耳朵をなでる。

「やめてくれ、セングム。そうやって私を許さないでくれ。私はお前がそう言うことをわかっていたのだ。例え国へは帰さぬ、目も治させぬと言ったところで、お前は私を恨まないだろう。きっと許すだろう。そのことを、私は分かっていた」

荒れ狂う風に翻弄される木々の枝のように声は揺れている。

「私はお前の優しさに甘えている。お前の優しさにつけこんで、不義を為そうとしている私を、私自身が許すことができぬ！ 治せるものなら私とお前の目を治してやりたい。緑なす丘陵を、雪の白く積もった山々を、地の果てまで続く赤銅色の砂漠を、天に散らばる星々をお前に見せてやりたい。けれど私は恐ろしいのだ。見えるようになったお前の目に、この世の美しいものを映したならば、お前はそちらへ行ったきり私の元へはもう帰ってこないかもしれない」

「わたしはどこへも行きません」

セングムは繰り返したが、シエンジンは頭を振った。

「わかっている。お前がそういう人間だと、私はわかっているはずなのに」

女王は両手で顔を覆う。

「信じ切れぬのだ。お前に咎があるのではなく、お前を 他人を信じ切れない私の心が全ての元凶なんだ……」

嗚咽の音が、雨音の合間を縫うようにして、セングムの耳へ届いた。静かなすすり泣きと、雨音と。房室に音は聞こえているのに、何故だかとても静かだった。

セングムは何か言おうと口を開く。しかし唇からは何の言葉も紡がれなかった。

もしもいま、この場で、胸を裂いて彼の心を女王に見せることができたなら。けれどシエンジンを苦しめているのは彼女自身の心であって、セングムの心ではない。ならばいい、どうすればいいのだろう。どのような言葉でこの心を表せばいいのだろう。どのような言葉をかければ、女王の心は安らぐのだろう。

そう考えて、唐突にセングムは気づいた。シエンジンと自分の間に、深々と果てなく横たわる深淵の存在に。かつては彼と家族の間に敷かれていた、深い断裂の存在に。

目の見えない自分の世界と、目の見える彼女の世界は全く別の世界なのだ。視力を失ったセングムは、「醜い」ということがどういうことなのか分からない。それがどういう概念で、どのような意味合いをもつものなのか、根底から理解することができない。醜いということを知らぬ、その苦しみを芯から理解できないセングムが、「顔の美醜など関係ない。醜かろうと何だろうと、わたしはあなたを慕っている」と、そう言ったところでいったい何になるのだろう。

セングムの言葉では、女王を決して安心させることができない。そのことに彼は気づいてしまった。世界を共有する者の間でのみ、言葉は有効なものとなる。例え同じ言葉をしゃべっていても、異国の人間とは決して重ならない部分があるように、世界が違えば、言葉は同じでも、その言葉が意味することは同じではないのだ。水底から水面へ叫んでも、ぶ厚い水の壁が言葉を吸い取って歪めてしまうように。

彼と、彼の家族もそうだったではないか。セングムは家族を愛していたし、家族も彼を愛していた。その想いに偽りはなかったが、互いの言葉の温度が同じになることは決してなかった。目の見える

家族は、目の見えないセングムの世界を「危険」という言葉で縛り、彼に何ひとつさせようとしなかった。家族の好意を持てあまし、己の忸怩たる想いを叫んでみても、水を隔てて対岸にいる彼らのもとに声は届かない。互いにどんなに心を言葉で伝えようとしても、発した傍から声は歪み、少しずれた位置を通りすぎていく。橋もなく船もなく、互いに叫び疲れた後には、ただ茫然と岸边に立ちつくすより他ない。

目が見えれば、とセングムは思った。

目が見えれば、女王と同じ世界を見られるのだろうか。彼女の苦しみがわかるだろうか。シエンジンの心の闇を言葉で照らしてやることができるのだろうか。

けれど目が見えるようになれば、きっとシエンジンはまた苦しむのだろう。セングムが彼女を見捨てないかと恐れ、そうした自分の猜疑心に苦しんで。しかも もしもシエンジンの言うとおり、目の見えるようになった自分がシエンジンを目にし、彼女の「醜さ」を理解して女王を嫌悪するようになったとしたら……。

いったいどうすればいいのだろう。

沈黙したままのセングムの耳に、雨が降る音が聞こえてくる。

湖に落ちる無数の雨滴。水面の表面に広がる波紋。けれど波紋は湖の表層を揺るがすだけで、その深みには決して届かない。暗がり
を照らすことができるのは光だけ。けれど自分は光を持たない。深淵にうずくまる魚は光を怯え、銀の鱗を闇に煌めかせて哀しんでいる。セングムは岸边の淵に立って、叫ぶ言葉も見つからないまま立ち尽くすより他ない。

……水に囲まれた離宮の奥。二つの心が互いを求めあい、探り合
って、けれど結局軌跡を交えることなく、夜明けを迎えようとして
いた。

抜けるように晴れたある日の午後、セングムは小亭の中に坐っていた。

空の色は 彼には見えなかったが すっかり秋めいた色合いをしている。小亭を通り抜ける微風にも、数日前には感じなかった冷たさが紛れこんでいた。

セングムの手には、弦を張り換えたばかりの琵琶がある。指で触れると、やや硬さの残る弦の感触が食い込んだ。反発と緊張とわずかな歪み。それらを同時に弾くと、深山に棲む瑞鳥の声に似た、深みのある音で琵琶が鳴った。

「セングム様、少しよろしいでしょうか」

背後から低く声をかけられる。カルガシュが彼のすぐ後ろに立っていた。セングムは弦を爪弾く手をとめる。

「何か報告があるのですか？」

セングムが問うと、カルガシュはほとんど唇を動かさずに、セングムにのみ聞こえるように話し始めた。

「故国より密使が連絡を 王陛下は正式に、タントスとの密約を結ばれたそうです。あとひと月もすれば、シャルハンへ攻め入る手はずが整うと」

「タントス……北方の遊牧民族の国ですね」

「はい。かの国は近年勢力を拡大しており、東方国家と西域国家を繋ぐ大陸行路の覇権を狙っております。シャルハンの攻略は、彼らの野望の足掛かりとなりましょう」

「そして我が国は、かの国の力を借り、シャルハンに奪われた土地を取り返すというわけですか」

苦渋よりも疲労の気配が濃い溜息が落ちる。

「タントスの騎兵は勇猛果敢。機動力に優れ、弓も剣も非常に能く使うと聞き及んでおりますが……」

「そのようです。私もタントスの騎兵団を見たことがありますが、彼らの馬術と弓技は並はずれております。兵はよく訓練されており、驚くほどの迅速さで行動しつつ、統率が乱れることはありません。敵に回せば非常に厄介な相手です」

「ですがシャルハンの将兵も歴戦の強者、一旦戦が始まれば、簡単

に決着はつきますまい。多くの人間が傷つき、多くの血が流される」

「おそらくは」

カルガシユは重々しく頷く。

「タントスとシャルハンの間に戦端が開かれれば、五年前の戦とは比べものにならない凄惨な戦いとなりましょう。そうなれば、いえ、それ以前に、シャルハンが我が国の裏切りを知れば、貴方様の命も危うくなります。その前にこの国を脱出するよう、陛下は強く求めておいでです」

セングムは答えない。若い護衛は、声にわずかに懇願する調子を滲ませて囁いた。

「どうか、ご自愛のほどを。陛下は貴方様が無事に戻られることを望んでおります。しかし、セングム様の命と、シャルハンへの侵攻を天秤にかけねばならなくなった場合、お心はどうあれ後者をお取りになるでしょう。シャルハンに事が知られてからでは遅うございます。脱出できる機会は、もういくらも残されていません。……よくお考えください」

最後の言葉は本当にかすかな声で囁いて、カルガシユは身を引いた。忠実な護衛。《水離宮》に仕える若い衛士は、セングムの身を守るため、祖国から使わされた間諜の一人だ。彼は決してセングムを裏切らない。セングムの命令に背くこともない。彼の本当の主は、この国の女王ではなくセングムであるからだ。女王に正体を気取られないよう、秘かに自分の命を守り、今また身を案じてくれている彼の心遣いに感謝しながらも、自分が祖国に戻ることはないだろうとセングムは予感していた。

セングムは琵琶を弾く。夢想的にまで美しい音色が、その指先から奏でられた。

遠く、水に隔てられた対岸に言葉は届かない。心を言葉で表そうとすることを、無意味なことだとは思わないが、互いの距離があまりに遠く、言葉が届かないこともある。ならばせめて、彼女のために琵琶を奏で続けようとセングムは思う。好きだと言ってくれたこ

の音を、同じように対岸で、言葉を失って立ち尽くしているあの人のために、そつと流し続けようと思っている。言葉は届かない。音色は水に消える。けれど切れ切れに届くかすかな旋律を、もしかしたら耳にすることがあるかもしれない。光の届かぬ水底にも、弦を爪弾くこの音が響くことがあるのかもしれない。

院子には午後の光が射しこみ、白く温かな光で照らされている。その光の中にセングムはひとつの光景を見た。遠い遠い向こう岸で、風にのって届いてくる、わずかな音色に耳を傾けている一人の娘。静まり返っていた青い水面に、やがて船の影が差す。陽光に煌めく水面を波打たせて進む船。唯一風のみを供として、船は静かに離宮へやって来る……。

琵琶の音色が空気に虹色の軌跡を残す。弦の一本一本から弾き出される音は、飛翔し、絡み合い、螺旋を描いて昇っていく。鳥も花も、風も空も、息をひそめて琵琶の音に聞き入っているかのようにだった。

彼女は必ず、ここへ来てくれる。

静かな確信と共に、セングムは琵琶を奏で続けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5346r/>

離宮にて

2011年3月16日13時25分発行